中野香織
「ファッション歳時記」
130

女王が愛される本当の理由

イギリスのエリザベス女王のプラチナジュビリー（在位70周年記念式典）が盛り上がりを見せていますね。

在位70年間の間に、多くの植民地が独立して、イギリスという国家そのものが衰退し、君主制も危機にさらされてきました。そのような状況のなかでも、エリザベス女王は、変化への柔軟な寛容さと、次世代に継承すべき伝統や品格といった価値を、不動の安定感をもって体現し続けてきました。いや、もう、かっこよすぎます。

「かっこよすぎ」という表現は、女王陛下に対して使うには「不敬」でしょうか？

いえ、英国的な視線においては、正当な褒め言葉の部類に入るでしょう。プラチナジュビリーに合わせて公開されるロジャー・ミッシェル監督のドキュメンタリー映画『エリザベス 女王陛下の微笑み』には、パロディや風刺演劇で表現されるエリザベス女王像も差し挟まれますが、そうした断片は、よくも王室は怒らないなというくらい「対等」な目線で描かれています。ポール・マッカートニーも若い頃の女王を回想して「ベイブ」（いかした女の子）と表現しています。

このドキュメンタリーには、パロディ以外にも、エリザベス女王の意外な「素顔」がふんだんに散りばめられています。競馬場でお気に入りの馬の優勝にはしゃいで喜ぶ。船の甲板でマジに鬼ごっこをする。首脳会議の記念撮影で周囲を笑わせる……。気取りなく、自然に表出するビッグスマイルや言葉には、愛らしい人間らしさがあります。王室という制度には反対でもエリザベス女王は好き、という声をしばしば聞きます。原理や政治思想、さらには宗教すら超えたヒューマニティの領域で、エリザベス2世が世界の人々を魅了していることを、あらためて実感します。

エリザベス女王をそのように「対等」な目線で見るロジャー・ミッシェル監督が描き出すのは、雲上の半神のような英国女王像ではありません。たまたま「英国女王」になってしまった一人の女性が、運命を受け入れ、できることを精一杯やり、その役割の質を高めることに日々、努力を惜しみなく続けているというヒューマンな英国女王像です。驕らず腐らず責務を果たすその姿勢にこそ、全人類からの敬意を受けるエリザベス2世の真の偉大さがあるということに、私たちは気付くのです。逆説的ですが、女王陛下だからと「上」に持ち上げられ称賛されるだけでは、ここまでの愛にあふれた敬意は得られなかったでしょう。

イギリスは階級社会ではありますが、そこには上が偉い下がダメといった上下構造はなく、むしろ、横並びの「違い」が多様にある、という印象です。上下構造から解放された対等な「違い」として他者を見ると、「上」をうらやんだり「下」を憐れんだりすることもなくなり、立場を超えた他者の真の姿に目を向けることにつながります。尊大になるのは滑稽だし、卑屈になる必要もない。結果として、自分自身の尊厳を守ることにもつながるということを、96歳のエリザベス女王の微笑みは教えてくれるのです。

©Elizabeth Productions Limited 2021

『エリザベス 女王陛下の微笑み』
6月17日(金)、TOHO シネマズ シャンテ、Bunkamura ル・シネマほか全国公開!

なかのかおり
1962年生まれ、富山市出身。服飾史家として研究・講演・執筆をおこなうほか、企業の顧問を務める。株式会社Kaori Nakano代表取締役。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授などを務めた。著書に、「『イノベーター』で読むアパレル全史」（日本実業出版社）、ほか多数。最新刊は共著『新・ラグジュアリー　文化が生み出す経済 10の講義』（クロスメディア・パブリッシング）。